

教員養成課程におけるキャンプ体験が 教職志望学生に及ぼす影響

岡野 昇*・富樫 健二*・重松 良祐*・加納 岳拓*

The effect of camping experience in teacher training courses on students wishing to become teachers

Noboru OKANO, Kenji TOGASHI, Ryosuke SHIGEMATSU and Takahiro KANO

要 旨

本研究の目的は、教員養成課程におけるキャンプ体験が、教職志望学生の自然体験活動の指導力にどのような教育効果があるか、また、キャンプ体験後の教職志望学生の「教職課程における自然体験活動の必要性」と「教員になるうえで役立つと思ったこと」を明らかにすることであった。

その結果、教員養成におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動の指導力を向上させる効果があり、特にその効果は「野外活動の技術」に認められ、青木・弼川(2012)の先行研究と同様な結果が見られた。また、キャンプ体験後の教職志望学生は、「教職課程における自然体験活動の必要性」について、全員から肯定的な回答が得られ、その理由は「教員としての力量」が最も多く、次いで「非日常体験」、「自己の成長」、「コミュニケーション力」の順であった。さらには、キャンプ体験後の教職志望学生は、「教員になるうえで役立つと思ったこと」は、全員が「ある」と回答し、その内容は主として、「指導法・指導者としての立場」、「企画運営」、「リスクマネジメント・対応力」であることが明らかとなった。

キーワード：自然体験活動、野外運動、キャンプ実習

1. はじめに

自然体験活動の重要性は、学校教育法において定められている。第二十一条二項では、「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」とされ、第三十一条により、「小学校においては、前条第一項の規定による目標の達成に資するよう、教育指導を行うに当たり、児童の体験的な学習活動、特にボランティア活動など社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるもの」とされている。

学校教育では、自然体験活動としての野外教育の充実が求められている一方で、野外教育の課題の1つとして、野外教育指導者の問題があげられる。例えば、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議(1996)では、「学校の教員は、学校が実施する野外教育プログラムの指導者であり、同時に、野外教育の専門的な指導者となり得る素養を持った人材でもある。しかし、今日の青少年だけでなく、教員を目指す大学生や教員自身に、豊富な自然体験や生活体験が不足していると指摘する教育関係者が少なくない」ことが報

告されている。

教員を目指す大学生のキャンプ未体験については、1983年から1985年の調査において、それぞれの年度で3割ほど存在するという報告(大橋, 1986)もある。

三重大学教育学部保健体育コースにおいても、コース専門科目として隔年で「野外運動(キャンプ)」を開講しているが、学生のキャンプ体験は年々減少している。「野外運動(キャンプ)」の授業が初めてのキャンプ体験にあたる受講生が、2007年では19.6%であったが、その10年後の2017年では32.4%に増加した。そして、本稿で対象とした2019年の受講生は61.8%と大きく増加した。

こうしたキャンプ未体験者の教職志望者が増加していく中で、キャンプ体験が教職志望者に及ぼす影響を調査した先行研究は、青木・弼川(2012)、下永田ら(2018)と少ない。

青木・弼川(2012)の研究結果からは、「①教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動の指導力を向上させる効果があり、その効果は『野外活動の技術』に顕著に見られた。②教員養成課

* 三重大学教育学部保健体育講座

程におけるキャンプ体験は、教職志望学生に学校教員が自然体験活動指導の資質・能力を有する重要性を理解させる効果があり、教員が自然体験活動を指導するためには、計画どおりに進まなかった際の判断力や状況の変化を予測する能力が必要だと感じている教職志望学生が多かった」と報告している。そして、教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動の指導力を向上させる効果や教職志望学生に学校教員が自然体験活動指導の資質・能力を有する重要性を理解させる効果があったことを明らかにしている。

また、下永田ら（2018）は、教員を目指す学生を対象に、複数回の宿泊を伴う自然体験活動を経験するカリキュラム（自分の実習経験を重視した活動から、運営・指導を重視した活動へとステップアップしていくカリキュラム構成）を通して、自然体験活動を指導するために必要な資質に関するアンケート調査を実施している。その調査結果からは、教員を目指す学生は大学入学当初は、自然体験が不足している傾向がみられたが、複数回自然体験活動を体験することにより、より自然に対する知識、理解、指導能力を高めることができることを報告している。また、自然体験活動を指導する際の資質能力を伸長させていくためには、養成段階においても、小・中学生の自然体験活動の指導補助等を経験できるようなカリキュラムを充実させていくことが重要であるとしている。

本研究で対象とする授業は、複数回の宿泊を伴う自然体験活動を経験するカリキュラムとして位置づいていないため、青木・粥川（2012）の先行研究に倣いながら、教員養成課程のキャンプ体験が、教職志望学生の自然体験活動の指導力にどのような教育効果があるかを明らかにすることを目的とする。また、キャンプ体験後の教職志望学生の「教職課程における自然体験活動の必要性」と「教員になるうえで役立つと思ったこと」を明らかにすることで、教員養成課程における「野外運動（キャンプ）」の基礎的資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 調査対象

本研究では、三重大学教育学部保健体育コースの2019年度「野外運動（キャンプ）」（選択必修）の受講生34名を対象とした。34名の内訳は、1年が17名（男子12名、女子5名）で、2年が17名（男子14名、女子3名）である。

分析対象者は、すべての実習に参加した34名（男子26名、女子8名／有効回答率：100%）とした。

2.2 授業概要

授業の概要は、次のとおりである。

○授業の概要

学校教育における野外教育の意味・意義を追求し、野外運動（キャンプ）に必要な知識・技術を学びながら指導者としての力量形成を目指す。

○学修の目的

学校教育における野外教育の意味・意義について理解し、野外運動（キャンプ）に必要な知識・技術を獲得することができる。

○学修の到達目標

野外運動（キャンプ）プログラムの作成とプログラムの実施を行うことができ、野外教育の意味・意義を踏まえた実践報告書の作成を行うことができる。

○学科・コース等の教育目標

教育に関する課題を意識した実践を企画・運営し、関係者と協力して問題解決に取り組むことができる。

自律的な学習者として、主体的に学び、振り返ることができる。

○授業担当者

授業担当者は4名で、団長・緊急・情報担当を第2筆者が、保健・救護担当を第3筆者が、プログラム・運搬・記録担当を第4筆者が、プログラム・渉外・会計担当を第1筆者が行った。

2.3 授業内容

事前指導は3回実施した。1回目は5月15日に実施し、履修確認や個人調査票の作成と本授業の目標・位置づけなどを説明した。また、事前課題として、『キャンプ指導者入門：第5版』（日本キャンプ協会）の第1部「理論編」の第1章「キャンプの特性」、第2章「キャンプの対象」の要約と考察を課した。2回目の事前指導は5月29日に行い、グループ編成を発表し、担当係やプログラム担当・企画などの役割を決定させた。また、事前課題として、『キャンプ指導者入門：第5版』（日本キャンプ協会）の第1部「理論編」の第3章「キャンプの指導」、第4章「キャンプの安全」の要約と考察を課した。同時に担当係やプログラム担当別の企画案の作成を課した。3回目の事前指導は6月19日に行い、プログラム担当別の中間プレゼンテーションを行い、改善点を明確にさせた。

実習は2部形式で実施した（表1）。実習Iは、7月6日に行い、午前はキャンプの基礎理論を知り、大学内で、アイスブレイキング、イニシアティブゲーム、コミュニケーションゲーム、レクダンスなどの実習を通して、主として人と人とのかわりに焦点をあてたキャンププログラムの構成の仕方の指導を行った。午後

からは、プログラム担当別の最終プレゼンテーションを行い、プログラムの内容・展開・留意点などの共有を図った。

実習Ⅱは7月13日～15日(2泊3日)の期間、朝明茶屋キャンプ場及び朝明溪谷で、野外炊事法、ネイチャーゲーム、登山、キャンプファイヤー、キャンドルファイヤーなどの実習を通して、主として人と自然とのかかわりに焦点をあてたキャンププログラムの構成の仕方の指導を行った。

事後指導は7月26日に行い、事後課題として実践報告書の作成及び担当プログラムの再構成(修正版)を課した。

2.4 調査方法及び内容

調査は5月15日の事前指導時に事前アンケート調査を、7月26日の事後指導時に事後アンケート調査を実施した。調査方法は自記式の調査票を用いた集合法とした。

調査票の内容は、事前アンケート調査では「自然体験活動の指導力」を、事後アンケート調査では「自然体験活動の指導力」、「教職課程における自然体験活動の必要性」、「教員になるうえで役立つと思ったこと」の3つとした。

「自然体験活動の指導力」は、国立オリンピック記念青少年総合センター(2001)の尺度を用いた。この尺度は、「集団活動やその指導の自信」(6項目)、「自

然に対する理解と不測の事態への対応」(6項目)、「野外活動の技術」(3項目)、「子どもに対する接し方」(3項目)、「仲間との協力関係」(2項目)の計5因子、20項目で構成されている。回答方法は、「きわめてあてはまる」、「かなりあてはまる」、「わりとあてはまる」、「すこしあてはまる」、「あてはまらない」の5件法とした。

「教職課程における自然活動体験活動の必要性」では、教職を志望している学生がどのように感じているかを把握するため、「教職課程(保健体育)において、今回の授業のような自然体験活動を行うことは必要だと思いますか」と設問し、「必要だと思う」、「どちらか」というと必要だと思う、「どちらか」というと必要だと思わない、「必要ないと思う」の4件法で回答を得た。また、その理由について自由記述で回答を得た。

「教員になるうえで役立つと思ったこと」では、教職を志望している学生の『『野外運動(キャンプ)』の活動のなかで、教員になるうえで役立つと思ったことはありますか』と設問し、「ある」、「ない」の2件法によって、またその理由は自由記述で回答を得た。

2.5 分析方法

「自然体験活動の指導力」については、キャンプ体験前後の変容を統計的に明らかにするため、対応のあるt検定を用いて分析を行った。分析にあたっては、5件法で得た各項目の回答を「きわめてあてはまる」を5点、「かなりあてはまる」を4点、「わりとあてはま

表1 実習内容

	実習Ⅰ 7月6日	実習Ⅱ(1日目) 7月13日	実習Ⅱ(2日目) 7月14日	実習Ⅱ(3日目) 7月15日
午前	アイスブレイキング イニシアティブゲーム コミュニケーションゲーム レクダンスなど	(キャンプ場へ移動)	朝の集い 朝食(野外炊事) 昼食用の弁当づくり 朝明溪谷登山 ↓ ↓	朝の集い 朝食(野外炊事) 清掃 さようなら活動(旗づくり、振り返りなど) 閉校式
午後	プログラム担当別 最終プレゼンテーション	昼食(弁当) 開校式 はじめまして活動(アイスブレイキング、旗づくり、イニシアティブゲーム、コミュニケーションゲームなど) 火起こし体験 夕食(野外炊事) キャンプファイヤー	昼食 朝明溪谷登山 ↓ ↓ ↓	(大学へ移動)

る」を3点、「すこしあてはまる」を2点、「あてはまらない」を1点とし、因子ごとに項目の得点を合算してその項目数で除することで各因子の平均点を算出した。その後、測定段階（事前アンケート調査、事後アンケート調査）ごとに各因子平均（M）及び標準偏差（SD）を算出し、対応のあるt検定を行った。加えて、上記の因子の得点の変容を具体的に検証するため、因子を構成する各項目についても回答の比率を測定段階ごとに算出し、比較検討を行った。統計処理はSPSS Statistics 25.0を用いて行った。

「教職課程における自然活動体験活動の必要性」の有無については単純集計で回答の割合を算出した。また、理由の記述についてはキーセンテンスを抽出し、キーワードとしてカテゴライズし、その件数を算出した。

3. 結果

3.1 自然体験活動の指導力

キャンプ体験による自然体験活動の指導力の変容を明らかにするため、キャンプ体験前後で対応のあるt検定を行った。その結果は、表2のとおりである。

分析の結果、自然体験活動の指導力に関する3つの因子において0.1%水準、2つの因子において1%水準で有意差が認められた。そこで、各因子のキャンプ体

験前後の得点差に着目してみると、最も得点差が大きかった因子は、「野外活動の技術」で1.12点の向上が見られ、次いで「集団活動やその指導の自信（1.02点向上）」、「自然に対する理解と不測の事態への対応（0.60点向上）」の順となっていた。また、測定時期ごとに各因子の得点を比較すると、事前・事後ともに「仲間との協力関係」因子が最も高くなっていた。

次に、各因子の変容を具体的に検証するため、各項目の「あてはまる」（「きわめてあてはまる」と「かなりあてはまる」の和）の割合を、キャンプ体験前と体験後で集計し、比較した。その結果は、表3に示したとおりである。

集計の結果、キャンプ体験前後で「あてはまる」の割合が最も向上した項目は、「集団活動やその指導の自信」因子の「集団宿泊研修の意義が理解できる」で44.20ポイントの向上が見られ、次いで同因子の「子どもの考え方や感じ方が理解できる」（41.20ポイントの向上）、「自然に対する理解と不測の事態への対応」因子の「キャンプ生活で予想される危険性をたくさんあげることができる」（34.80ポイント）の順となっていた。また、測定時期ごとに各項目の「あてはまる」の割合を比較すると、事前・事後ともに「集団活動やその指導の自信」因子の「自分の技能や知識を他人のために役立てたい」が最も高くなっていた。

表2 自然体験活動の指導力の変容（平均）

因子名	調査項目	pre		post		t値	
		M	SD	M	SD		
集団活動やその指導の自信		2.39	0.94	3.41	0.89	-10.25	***
	人前で自分の意見がはっきり言える	2.82	0.81	3.15	0.83	-1.73	
	集団にゲームなどの指導をするのが得意である	2.38	0.85	2.94	0.95	-2.69	*
	道具などの使い方を他人に説明するのが得意である	2.53	0.83	3.21	0.73	-3.16	**
	集団宿泊研修の意義が理解できる	3.00	0.74	3.68	0.77	-3.61	**
	自分の技能や知識を他人のために役立てたい	3.66	0.79	3.91	0.82	-1.22	
	子どもの考え方や感じ方が理解できる	3.00	0.78	3.53	0.90	-2.66	*
自然に対する理解と不測の事態への対応		2.38	0.94	2.99	1.06	-6.88	***
	突発的な事柄にも落ち着いて対応できる	2.97	0.87	3.24	0.85	-1.43	
	キャンプ生活で予想される危険性をたくさんあげることができる	2.85	0.67	3.52	0.91	-3.65	**
	環境教育や自然教育についての知識に自信がある	1.88	0.81	2.76	1.07	-3.97	***
	自然の中では天候が急に変更した場合のことを常に考えて行動している	2.21	0.84	3.06	0.98	-3.81	**
	虫や動物についての知識に自信がある	1.79	0.88	2.26	1.11	-2.22	*
	天候変動に柔軟に対応できる	2.62	0.89	3.09	1.00	-1.93	
野外活動の技術		1.75	0.87	2.87	1.03	-9.18	***
	キャンプの技術や知識に自信がある	1.76	0.85	2.82	1.03	-5.13	***
	登山の技術や知識に自信がある	1.62	0.74	2.71	0.91	-5.58	***
	野外での火起こしや炊事の技術や知識に自信がある	1.88	1.01	3.09	1.14	-5.15	***
子どもに対する接し方		3.12	1.00	3.58	0.97	-3.42	**
	どんな子どもにも気軽に話ができる	3.09	0.97	3.59	1.08	-1.84	
	子どもの遊び相手が得意である	3.12	1.17	3.55	0.97	-1.72	
	子どもの意見をよく聞いて話し相手になることができる	3.15	0.89	3.62	0.89	-2.48	*
仲間との協力関係		3.19	0.95	3.68	0.76	-3.47	**
	子どもに適切な生活や活動等の指導ができる	2.79	0.84	3.38	0.70	-3.11	**
	仲間と協力した活動を通じて様々なことが得られる	3.59	0.89	3.97	0.72	-1.85	

n=34

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表 3 自然体験活動の指導力の変容（「あてはまる」の割合）

因子名	調査項目	①事前 調査	②事後 調査	②-① 差
集団活動やその指導の自信				
	人前で自分の意見がはっきり言える	20.6	30.3	9.7
	集団にゲームなどの指導をするのが得意である	8.9	26.5	17.6
	道具などの使い方を他人に説明するのが得意である	5.9	32.4	26.5
	集団宿泊研修の意義が理解できる	17.6	61.8	44.2
	自分の技能や知識を他人のために役立てたい	55.9	78.1	22.2
	子どもの考え方や感じ方が理解できる	20.6	61.8	41.2
自然に対する理解と不測の事態への対応				
	突発的な事柄にも落ち着いて対応できる	26.5	32.4	5.9
	キャンプ生活で予想される危険性をたくさんあげることができる	15.2	50.0	34.8
	環境教育や自然教育についての知識に自信がある	5.9	20.6	14.7
	自然の中では天候が急に変更した場合のことを常に考えて行動している	5.9	35.3	29.4
	虫や動物についての知識に自信がある	5.9	14.7	8.8
	天候変動に柔軟に対応できる	17.6	32.6	15.0
野外活動の技術				
	キャンプの技術や知識に自信がある	2.9	26.5	23.6
	登山の技術や知識に自信がある	0.0	20.6	20.6
	野外での火起こしや炊事の技術や知識に自信がある	8.8	41.2	32.4
子どもに対する接し方				
	どんな子どもにも気軽に話ができる	26.5	52.9	26.4
	子どもの遊び相手が得意である	41.2	54.5	13.3
	子どもの意見をよく聞いて話し相手になることができる	32.4	55.9	23.5
仲間との協力関係				
	子どもに適切な生活や活動等の指導ができる	14.7	38.2	23.5
	仲間と協力した活動を通じて様々なことが得られる	47.1	73.5	26.4
n=34				

3.2 教職課程における自然体験活動の必要性

教職課程（保健体育）における自然体験活動の必要性について尋ねたところ、「必要だと思う」と回答した学生が 82.4%で、「どちらかというとも必要だと思う」と回答した学生が 17.6%であった（図1）。

「必要だと思う」と「どちらかというとも必要だと思う」と回答した学生の理由を訊ねたところ、理由記述のキーセンテンスとして、全部で 44 件であった。それをカテゴライズしたところ、「教師としての力量（27 件）」、「非日常体験（9 件）」、「自己の成長（5 件）」、「コミュニケーション力（3 件）」の 4 つに分類された（表 4）。

主な理由例として、「教師としての力量」では、「将来、教員になり子どもたちをキャンプに連れていく立場になった時、役に立つと思ったから」、「体験活動を通して、生徒に何を身につけるかなどを想像して授業をつくっていかねばならないため必要である」などがあげられ、「非日常体験」では、「実際に自然の厳しさを体験し、非日常的な生活の経験が必要であると思うから」、「キャンプという便利なものが少ない中で

行う体験は、普段自分たちが生活している世界とは大きく異なり、その中で学ぶことは多いと思う」などがあげられた。また、「自己の成長」では、「野外活動では普段経験することのできない経験をすることができ、そこから様々な知識を得て、自己の成長にもつながると思うから」などがあげられ、「コミュニケーション力」では、「仲間と協力することも重要となり、コミュニケーション力もつくから」などがあげられた。

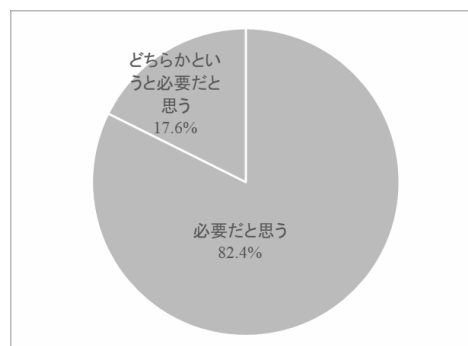


図 1 教職課程における自然体験活動の必要性

3.3 教員になるうえで役立つと思ったこと

教員になるうえで役立つと思ったことの有無について尋ねたところ、「ある」と回答した学生が100%で、「ない」と回答した学生はいなかった（図2）。

「ある」と回答した学生の理由を訊ねたところ、理由記述のキーセンテンスとして、全部で45件を抽出することができた。それをカテゴリ化したところ、「指導法・指導者としての立場（16件）」、「企画運営（13件）」、「リスクマネジメント・対応力（9件）」、「知識・技能（4件）」、「コミュニケーション力（3件）」の5つに分類された（表5）。

主な理由例として、「指導法・指導者としての立場」では、「児童・生徒への指導の仕方を学べたから」、「今回、先生方が指導しているのを間近に見ていて、気を付けなければならないことを見つけたことができたから」、「指導者という立場におけるキャンプは、今まで行ってきたものと視点が全く違うから」などがあげられ、「企画運営」では、「自分たちだけで企画・運営することによって、実際教員になった際、応用が効くと思ったから」、「計画・準備の必要性を身をもって経験することができたから」などがあげられた。また、

「リスクマネジメント・対応力」では、「どのような所に危険があるかなどをよく理解し、安全に配慮ができるようになったから」など、「知識・技能」では、「まずは基本的なキャンプをする上での知識・技能を学べたから」など、「コミュニケーション力」では、「先輩方とのコミュニケーション力の向上につながったから」などがあげられた。

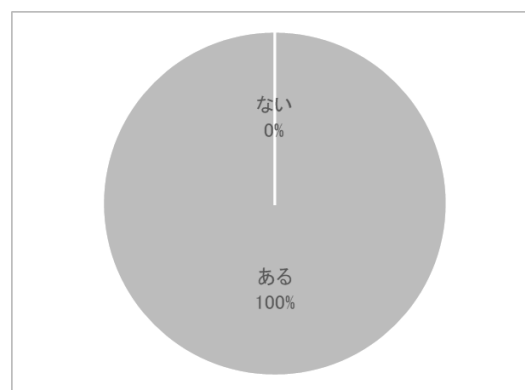


図2 教員になるうえで役立つと思ったこと

表4 教職課程における自然体験活動の必要性（理由）

キーワード	数	理由例
教員としての力量	27	将来、教員になり子どもたちをキャンプに連れていく立場になった時、役に立つと思ったから。教員になった後、児童・生徒を引率しキャンプを行うことは多くあり、その際に経験しているかしていないかは多くの影響を及ぼすと考えるから。体験活動を通して、生徒に何を身につけるかなどを想像して授業をつくっていかねばならないため必要である。
非日常体験	9	実際に自然の厳しさを体験し、非日常的な生活の経験が必要であると思うから。現在社会の中で、疎遠となっている自然というものへの接点を持つ機会となった。キャンプという便利なものが少ない中で行う体験は、普段自分たちが生活している世界とは大きく異なり、その中で学ぶことは多いと思う。
自己の成長	5	野外活動では普段経験することのできない経験をすることができ、そこから様々な知識を得て、自己の成長にもつながると思うから。日常生活から逸脱し、多くの自然に触れたり様々な経験をすることは、自分の成長につながると思うから。
コミュニケーション力	3	仲間と協力することも重要となり、コミュニケーション力もつくから。1・2年の交流の場としても丁度よい。

表5 教員になるうえで役立つと思ったこと（理由）

キーワード	数	理由例
指導法・指導者としての立場	16	児童・生徒への指導の仕方を学べたから。今回、先生方が指導しているのを間近に見ていて、気を付けなければならないことを見つけたことができたから。指導者という立場におけるキャンプは、今まで行ってきたものと視点が全く違うから。教員としての立場でキャンプを体験した時、普段感じれないことが感じることができ、たくさんことを学んだから。
企画運営	13	自分たちだけで企画・運営することによって、実際教員になった際、応用が効くと思ったから。計画・準備の必要性を身をもって経験することができたから。教師側の立場として、プログラムを作成し、実行できたこと。実際に自分たちで企画をして、それを実行することの難しさを経験でき、今回学んだことを次に活かしていけると思った。
リスクマネジメント・対応力	9	どのような所に危険があるかなどをよく理解し、安全に配慮ができるようになったから。リスクマネジメントがいかに大切か学んだ。指導者の立場になった時、様々なリスクを考えた上での準備が必要である。キャンプの知識だけでなく、様々なことへの対応力。その場に応じる力、予期せぬ出来事に対応する力が今回身についた中で最も教員に役立つことができると思う。
知識・技能	4	まずは基本的なキャンプをする上での知識・技能を学べたから。火の起こし方やキャンプファイヤーの時の薪の組み方は、今まで知らなかったことなので、今回で習得できた。
コミュニケーション力	3	先輩方とのコミュニケーション力の向上につながったから。生徒どうしてコミュニケーションをとることを図る、よい課題だと思うから。

4. 考察

キャンプ体験による「自然体験活動の指導力」の変容を明らかにするために行った調査結果から、「集団活動やその指導の自信」、「自然に対する理解と不測の事態への対応」、「野外活動の技術」、「子どもに対する接し方」、「仲間との協力関係」のすべての因子において有意な向上が認められた(表2, 表3)。この結果は、青木・粥川(2012)の先行研究とも一致しており、教員養成課程におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動を向上させる効果があることが明らかになった。

5つの因子のキャンプ体験前後の得点差において、最も得点差が大きかった因子は、「野外活動の技術」で1.12点の向上が見られ、次いで「集団活動やその指導の自信(1.02点向上)」、「自然に対する理解と不測の事態への対応(0.60点向上)」の順であった。この結果から、学生側から見た野外運動(キャンプ)に必要な知識や技術とは、登山や火起こしや野外炊事などの「野外技術」、集団へのゲームや道具の指導などの「集団活動の指導」、キャンプ生活における危険や急変する天候への対応などの「リスクマネジメント」であることが考えられる。

しかし、最も大きな向上が見られた「野外活動の技術」の因子は、事前調査、事後調査ともに他の因子と比べ、最も低い値を示していた。「自然体験活動の指導力の変容(「あてはまる」の割合)」(表3)をみても、事前調査では「キャンプの技術や知識に自信がある」学生は3%を下回っており、「登山の技術や知識に自信がある」学生は0%であった。その後の調査でも20%程度であったことから、「野外活動の技術」は大きく向上しているものの、自信が持てるほどの技術が身についたとは言い難い。この結果についても、青木・粥川(2012)の先行研究と同様であり、昨今指摘されている教職志望学生の生活体験の不足(別惣ら, 2007)が浮き彫りにされた。しかしながら、教員養成課程にキャンプ体験をとり入れることは、教職志望学生の自然体験活動の指導力に効果があると同時に、教職志望学生の生活体験不足を補完する機能を果たすものと考えられることから、意義があるものと思われる。

次に、「自然体験活動の指導力の変容(「あてはまる」の割合)」(表3)で事前調査と事後調査の得点差が最も高かった項目は「集団宿泊体験研修の意義が理解できる」であり、40%以上の学生が事後に「あてはまる」と回答したことが分かった。これは、本授業の学修の目的である「学校教育における野外教育の意味・意義について理解し、野外運動(キャンプ)に必要な知識・技術を獲得することができる」の中でも特に、「学校教育における野外教育の意味・意義について理解する」

ことに関わる目的にせまるものとして考えられる。なぜなら、「教職課程における自然体験活動の必要性」について、「必要である」と回答した理由に、「現在社会の中で、疎遠となっている自然というものへの接点を持つ機会となった(非日常体験)」、「日常的な生活から逸脱し、多くの自然に触れたり様々な経験をすることは、自分の成長につながると思うから(自己の成長)」、「仲間と協力することも重要となり、コミュニケーション力もつくから(コミュニケーション力)」などがあげられているからである。これらのことから、キャンプ体験は、集団宿泊体験研修の意義の理解に貢献するものとして考えられ、学生側から見たその価値は「非日常体験」、「自己の成長」、「コミュニケーション力」であることが明らかになった。

「集団宿泊体験研修の意義が理解できる」以外にも、「子どもの考え方や感じ方が理解できる」ようになったと回答している学生が40%以上いることが分かった。「教職課程における自然体験活動の必要性」について、「必要である」と回答した理由として、「将来、教員になり子どもたちをキャンプに連れていく立場になった時、役に立つと思ったから」、「体験活動を通して、生徒に何を身につけるかなどを想像して授業をつくっていかねばならないため必要である」など、「教員としての力量」として意味づける回答が多く見られた。このことは、キャンパー(子どもとしての立場)として活動へ参加しながら、そこでの気づきや感じたことを、プログラムや授業へつなごうとする「教員としての立場」も併せ持ちながら活動へ参加していたことが分かる。本項目の数値の向上は、授業の概要に示してあるように、2つの立場からのキャンプ体験活動への参加がもたらせたものだと考えられる。

「教職課程における自然体験活動の必要性」については、「必要だと思う」が82.4%で、「どちらかという必要だと思う」が17.6%であり、肯定的な回答が100%であった。その理由として、「教員としての力量」が最も多く60%以上であり、続いて「非日常体験」、「自己の成長」、「コミュニケーション力」の順であった。このことを授業概要の「学校教育における野外教育の意味・意義を追求し、野外運動(キャンプ)に必要な知識・技術を学びながら指導者としての力量形成を目指す」に戻って整理してみると、学生は学校教育における野外教育の意味・意義を「非日常体験」、「自己の成長」、「コミュニケーション力」として追求し、「野外活動の技術」を中心として学びながら、「教員としての力量」形成に努めていたものと推察できる。

「教員になるうえで役立つと思ったこと」については、全員の学生が役立つと回答し、その理由として、「指導法・指導者としての立場」が30%強、「企画運営」

が30%弱、「リスクマネジメント・対応力」が20%となっており、以下、「知識・技能」、「コミュニケーション力」の順であった。この結果は、前述した「教員としての力量」の内容に結びつくものと考えられ、学生が「教員としての力量」形成に努めていた内容は大きく3つあることが分かる。1つ目は、「児童・生徒への指導の仕方を学べたから」、「指導者という立場においてのキャンプは、今まで行ってきたものと視点が全く違うから」などの「指導法・指導者としての立場」、2つ目は、「計画・準備の必要性を身をもって経験することができたから」、「実際に自分たちで企画をして、それを実行することの難しさを経験でき、今回学んだことを次に活かしていけると思った」などの「企画運営」、そして3つ目として、「どのような所に危険があるかなどをよく理解し、安全に配慮ができるようになったから」、「その場に応じる力、予期せぬ出来事に対応する力が今回身についた中で最も教員に役立たせることができると思う」などの「リスクマネジメント・対応力」である。いずれの内容も、自然を対象とする指導法や指導者の立場、自然を対象とするプログラムの計画と運営、自然を対象とする危機管理や安全管理という見方であり、予定調和的ではない場面に遭遇した際の自分自身の立ち居振る舞いについて学んだことがうかがえる。

5. 結論

本研究の目的は、教員養成課程にキャンプ体験が、教職志望学生の自然体験活動の指導力にどのような教育効果があるか、また、キャンプ体験後の教職志望学生の「教職課程における自然体験活動の必要性」と「教員になるうえで役立つと思ったこと」を明らかにすることであった。

その結果、教員養成におけるキャンプ体験は、教職志望学生の自然体験活動の指導力を向上させる効果があり、特にその効果は「野外活動の技術」に認められ、青木・弼川（2012）の先行研究と同様な結果が見られた。また、キャンプ体験後の教職志望学生は、「教職課程における自然体験活動の必要性」について、全員から肯定的な回答が得られ、その理由は「教員としての力量」が最も多く、次いで「非日常体験」、「自己の成長」、「コミュニケーション力」の順であった。さらには、キャンプ体験後の教職志望学生は、「教員になるうえで役立つと思ったこと」は、全員が「ある」と回答し、その内容は主として、「指導法・指導者としての立場」、「企画運営」、「リスクマネジメント・対応力」であることが明らかとなった。

今後の課題として、昨今指摘されている教職志望学生の生活体験の不足を鑑み、本研究で得られた結果を

踏まえ、同様の調査研究をとおした継続的な検討があげられる。

引用・参考文献

- 青木康太郎・弼川道子（2012）キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響。北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報，3：21-28。
- 別惣淳二・千駄忠至・嶋崎博嗣（2007）自然体験活動の指導で求められる教師の資質能力に関する一考察（Ⅱ）-1学期と2学期における子どもの活動の成果との関連に着目して-。兵庫教育大学研究紀要，31：23-31。
- 国立オリンピック記念青少年総合センター（2001）事業効果測定のための調査票とその利用方法-主催事業評価の一方法としての参加者の変容測定方法の開発に関する調査研究報告書-。国立オリンピック記念青少年総合センター：46-51。
- 日本キャンプ協会指導者養成委員会（2019）キャンプ指導者入門 第5版。公益社団法人 日本キャンプ協会。
- 大橋正春（1986）教員養成大学学生のキャンプ経験について。新潟体育学研究：37-42。
- 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議（1996）青少年の野外教育の充実について（報告）。文部科学省生涯学習局青少年教育課 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議。
- 下永田修二・七澤朱音・西野 明・杉山英人・小宮山伴与志・佐藤道雄・坂本拓弥（2018）保健体育科における宿泊を伴う自然体験活動が教員を目指す学生の意識に与える影響。千葉大学教育学部研究紀要，66（2）：183-190。